民衆と権力

――『ボリス・ゴドゥノフ』試論――

佐々木彰

ロシヤ文学の最古の作品である年代記（一二世紀）にあらわれたヴァリャーグの侯たち――リューリック――のロシヤへの招聘伝説は、ロシヤ人の考える民衆と権力との関係を理解するのに、きわめて暗示的であるように思われる。すなわち原初年代記によれば、古代ロシヤ人の間には正義がなく、氏族は氏族に歯向い、内乱相次ぎ、相互に戦ったのであるが、やがて彼ら自ら反省するようになり、「我らを領し、掟に従って裁くような侯を深す」ことに決める。そして使者が、「海の彼方のヴァリャーグ人のもとへ――ルーシ《族》のもとへ赴いた（これらのヴァリャーグ人はルーシと呼ばれた）。ルーシに向ってチェージ、スロヴェン、クリヴィチおよびヴェーシ《の諸族》は言った、『われわれの地は広大であり、豊かであるが、その中には秩序がない。来って君臨し、われらを領せよ』と」。その結果リューリックら三人の兄弟が氏族をつれてロシヤにやって来た、というのである（除村吉太郎訳『ロシヤ年代記』一八頁）。

もちろん、われわれは年代記のリューリック伝説をそのまま史実として信頼するものではない。それにもかかわらず、おそらくは支配階級の利益を反映したであろう、僧侶によって書かれたこの記述の重要性は、些かもその価値を

減じるものではない。いや、その反対に、支配階級の、あるいは当時の知識人の、政治に対する考え方が、きわめて明確に反映している点で、すこぶる注目すべきであるように思う。ここに示された政治思想は、いわば統治者機関説である。統治者は秩序ある政治の確立のためにこそ、民衆に必要な存在なのであり、そのために呼ばれてロシヤに来った統治者は、秩序ある政治を樹立することを自らに義務づけたわけである。言いかえれば統治者と被治者との関係は元来対等であって、上下関係が――征服と被征服などの――最初にあったのではない。別言すれば民約説に他ならない。すくなくとも統治者は、もしも自己本来の義務と本分に違背して正しい政治ができなかった場合、もはや統治者としての特権的地位を失わざるを得ないのである。そして年代記にこの記載が見られるということは、年代記が書かれた当時において、すでにそのような政治思想が支配的であったということである。このような権力と民衆との相関関係を、たとえばつい十余年前までわが国において支配的であった統治権力の神授思想と比較して考えるとき、彼我のへだたりの甚だしいのに誰しもが気づくであろう。ロシヤが政治、文化その他あらゆる点で西欧の後塵を拝しながらも、権力の本質の把握においては西欧に先んじていたことは興味深い。とはいえ、年代記に見られるものは政治思想の萌芽にすぎなかった。この政治権力と民衆との問題を深く掘り下げることによって、現代的意義をなお失わない重要な文学作品が、当時二五歳の青年詩人、ア・エス・プーシキン（一七九九―一八三七）によって書かれた。戯曲『ボリス・ゴドゥノフ』（一八二五）がそれである（ただし出版されたのは一八三一年であり、上演を許されたのは一八七〇年）。

皇帝フョードル・イワーノヴィチ（一五五七―九八）（在位一五八四―九八）の死によってロシヤの帝位は空位となった。雷帝イワン四世（一五三〇―八四）（在位一五三三―八四）の血統は絶えてしまったわけである。ここにフョードル皇帝の執政官であったボリス・ゴドゥノフ（約一五五一―一六〇五）が大きく舞台の表面に浮び出る。もしボリスが代々ロシヤで名門を誇る家柄の出であったならば、実力者として威勢並ぶもののない彼が帝位を踏むのに、さして問題はなかったであろう。けれどもボリスはロシヤ貴族としてはいわゆる成上り者であり、妹イリーナがフョードルの皇后となることによって帝室の外戚になり、勢力を得、ついに執政官となったのである。したがってボリスが帝位につくためには、それを有力なものとする何かが必要となってくる。たとえば有力な名門貴族の間で了解を取りつけておくことが考えられる。あるいは名だたる将軍たちを後楯として持たなければならないかも知れない。ことによれば宗教界の首脳部の協力も必要であろう。しかしボリスにとって最も必要なのは人民が彼の即位を強く要望し、支持することである。少くともそのような形をとった上で即位するのだということを印象づけることが必要であるように、ボリスは考える。ボリスが帝冠を受けることを躊躇するのは、もっぱら演出効果を狙ってのことであるのは言うまでもない。政治の駆引きに長じているシュイスキイ侯のごときは、とっくにそれを見ぬいている。「貴公どう思う、この騒ぎはどう結末がつくだろう？」というヴォロトゥインスキイの問に対するシュイスキイの返事がそれを語っている。

シュイスキイ

どう結末がつくと？　知れたことさ。

人民がもっと泣いて、わめけば、

酒杯を前にした酔いどれのように、
ボリスはもそっと眉をひそめて、
つまりは己の御仁慈により
大人しく王冠を受けることを肯んじよう。(1)

執政官から帝位につくことを一月も承諾しようとしないボリスの胸中を、ヴォロトゥインスキイのような利口でない貴族は、これはボリスが皇帝の死によって受けた悲しみのせいでもあろうかと察し、「もしも執政官が実際に煩瑣な国務にうんざりして　空位の帝位につかなければ、どうだろう?」と心配する。また広場に集った人民の一人は、

人民一

願いは聞いてもらえない！　ボリスは
祭司長たち、貴族たち、総主教を追払った。
皆が彼の前でひれ伏したがむだであった。
玉座の光が彼を恐れさせているのだ。(2)

と解釈する。ボリスの計略が図に当ったというわけである。

一方、貴族会議の決定がシチェルカーロフの口を通じて一般に布告される。それによれば最後の請願を試みることが決定されたという。最後であるからには、ここでボリスが即位を拒めば、彼は永久にロシヤ皇帝となるチャンスを失うことになる。ボリスの野心がそれを許すはずはない。彼はただ、もっとも華やかな即位受諾の、いわば劇的シー

ンを胸中に描いて、自分の出番を待っているのである。シチェルカーロフの伝える次の日の行事も、おそらくボリスの計画の中に仕組まれているものにちがいない。

明朝ふたたび総主教が、
クレムリンで荘厳に祈禱の儀を行って後、
聖なる教会旗を先頭にかかげ、
ウラヂーミルの聖像、ドンスコーイの聖像を捧持して
お出ましになり、彼と共に最高宗務院、貴族たち、
それに大勢の士族、それに人民の総代ら、
また正教を奉ずるモスクワの全人民が、
我ら一同が、再度皇后に御懇願に参ろう。
皇后が寄辺なきモスクワを憐れみたまい、
ボリスを帝位に祝福なさるように。
では皆の衆、御機嫌よう引取られ、
お祈りめされ、正教徒の切なる祈りを
天までも届かせるように。(3)

舞台は次に乙女ヶ原、新乙女修道院へと移る。行事は予定通り滞りなく進行する。けれどもここに集った人民——

あるいは掻き集められた人民の声は、ボリスの皇帝即位が自分たち民衆とは無縁であること、芝居の台本を書いたのが貴族であることを証言している。「ああ、我らの父よ、憐みたまえ！　我らを治めたまえ！」と人民は跪いて泣き叫ぶが、何のために泣くのか自分でも意味がわからない。

人民一（そっと）

何だって泣いているのだ？

人民二

俺たちの知ったことかい？　それは貴族たちが御存知だ！

俺たちの分じゃないよ。(4)

赤子をつれた女房のごときは、大人しくしている子供をわざわざ叱りつけ、おどし、地べたに放り出して、しゃにむに泣かせる始末である。なかには人並みに泣こうと思うのに泣けない大人たちもいる。

人民一

皆泣いている――

泣こうぜ、兄弟、俺たちもな！

人民二

力んでるんだが、兄弟、出来ねえよ。

人民一

俺もだ。葱はないか？　眼を擦るのだ。

人民二

いや、俺は唾を塗るよ。何かまだやるのかな？

人民一

誰がそんなこと知るもんかい。[5]

このような舞台裏の声をよそに、少くとも表面では、「人民ども　王冠は彼のものだ！　彼が皇帝だ！　彼は承諾した！　ボリスが我らの皇帝だ！　ボリス万歳！」として、めでたし、めでたしの幕が下りる。けれども、さきに述べたように、ボリスの即位に当っての人民の祝福がけっして人民の心からの声でないことが、陰で糸を引く何者かの演出であることがすこぶる明白に示されていると言うことができる。ここで最も強調したいことは、専制政治家ボリスといえども、たとえ虚構でも、人民の意志を尊重しなければならないことを自覚している点、そしてそれが政治の常識とみなされている点なのである。人民の力を認めるにやぶさかでないのはシュイスキイも同様である。「ボリスが謀(たばかり)をやめぬ時は、人民を巧みに動揺させるのだ」。という彼の言葉は、政治家シュイスキイにとっての人民の利用価値を、この上なく単的に表現したものであろう。

さて、即位を承諾したボリスは、クレムリンで貴族たちに忠誠を誓わせたのち、ロシヤ歴代皇帝の墓参をし、そのあとで全人民を酒宴に招く。「貴人より盲の乞食まで」、誰でもが「出入自由」の盛大なうたげが催される。

しかし六年の歳月はボリスの期待を裏切った。政治家としてのボリスは民心を得ることに成功しない。家庭の父と

してのボリスは不幸である。その上、ボリスの良心には、自分がドミトリイ皇子の殺害者だという汚点がある。ボリスのあの有名なモノローグ（のちにムーソルグスキイによってオペラ化され、シャリャーピンの詠唱によって知られる）の中では、ボリスの人民に対する政治には落度がないかのごとくである。飢饉や大火のごとき非常の災害のさいには、少くともボリスとしては打つべき充分な手は打ったという良心の安らかさが見られる。けれどもそれは、あくまでも彼の主観なのであって、なぜ民心が彼を離れたか（この言い方は実は正しくない。なぜならもともとボリスは、人民の真正の意志によって選ばれたわけではないからである。）は、場面の展開とともに明らかとなる。

中世の人間であるボリスには、天災や人間の不幸が神の裁きであるという一種の信仰がある。そこで飢饉や、大火や、家庭の不幸の原因を自分なりにつきとめようとするとき、ボリスは過去における自分の暗い所業を思い出さないわけにはいかない。それはほかでもない、フョードルの弟ドミトリイ（一五八二―九一、生母はイワン雷帝の五番目の妻マリーヤ・ナガーヤ）を暗殺して、皇位継承（フョードルには継嗣がなかった）における自分の立場を揺ぎないものとしたことである。この良心の責苦のために彼の「魂には幸福がない」。家庭の中に慰めを見出そうとしたのにそれさえも裏切られる。娘の花聟が急死するのである。ボリスは言う、現世の悲しみを和げることのできるのは良心だけだ、と。

そうじゃ、健全な、良心は、
悪意にも、暗い誹謗にも打勝とう。
だがもしも良心にたった一つでも染がつけば、

たった一つでも偶然ついたら、
さあ大変だ！　ペストに罹ったように
魂は燃えつき、心は毒物で満ち溢れ、
耳の中では、槌で叩くように、非難が音をたてる。
始終むかついて、目まいがし、
血塗れの男の子たちが目に映る……
いっそ逃げ出したいが、逃げ場がない……恐ろしい！
そうじゃ、良心の汚れた人間は、不愍なものじゃ。(6)

このようにボリスの心には救いがない。ボリスがメロドラマの主人公たり得る所以である。ところで、ボリスの政治業績に対する批判の中で、アファナーシイ・プーシキンが、ボリスの恐怖政治、密告政治を痛烈に弾劾しているのは、実際の政治の面から眺めての、僭称者の出現を可能ならしめる背景、ないしは基盤を明らかにしたものとして注目されるべきであろう。明日の自分の運命を確信できない貴族たちの不平不満もさることながら、ユーリイの日の廃止に象徴される農奴制度の定着が、人民――農民――の強い不満を呼び、もし僭称者が現われて、「彼らに昔のユーリイの日を与える約束をしたら」、人民の心はたちまち僭称者に傾き、ボリスを棄て去るであろうことが指摘されているのは、政治と経済体制との密接な相関関係の見事な分析である。

それではボリス政権に対する貴族たちの態度はどうか？　冒頭の場面でのシュイスキイ、ヴォロトゥインスキイ両

侯の対話に見られるように、そもそもボリスの即位の初めから、ボリスに好意を持っていない。ただ彼らが公然とボリスに叛旗をひるがえさないのは、おそらくは長年にわたる事実上のロシヤの統治者としてのボリスのいわゆる実力が、ある程度ものを言ったのでもあれば、また多少とも有能な貴族が、シュイスキイのように巧妙な立回りをしたものは別として、ボリスに追放されたためであろう。その反面、自身「昨日の奴隷」であり、「韃靼人」であり、「マリュータの婿」であるボリスのとった政策は、名門貴族でない、陽の当らない貴族を登用して自己の勢力を固める方向に向けられた。

門地でなく、才智を司令官に任ずるのだ。
家柄の上下を論う彼らの尊大を嘆かしてやるのだ。
名門の者どもの不平を顧慮せず、
破滅に導く陋習を打破する時がきたのじゃ(7)

というボリスの言葉は、死の直前のものであるが、彼の統治の全期間にわたっての方針だと見ていい（だたし歴史的事実を述べるならば、農奴制はイワン雷帝の時代にすでにはじまっていたものであり、ボリスはその政策を踏襲したにすぎない。その他、プーシキンの戯曲が多くの虚構を許していることは言うまでもない）。ボリスの政治は旧来の支配階級の利益に反した。何か政治的な改革をおこなうさいには、その改革によって不利益を受ける側からの強い抵抗がある。それを排除する必要上、為政者は新しい層の中に自己の協力者を求める。その例はピョートル一世の人材登用にも見られるところである。

同じバスマーノフとの対話の中で、ボリスが自己の人民観を吐露している部分では、専制君主が人民をどう見ているかが、露骨に表明されている。

バスマーノフは言う、

人民はいつでも秘かに動乱を慕うものです。
騏馬が己の馬銜(はみ)を噛むのも、
父の権力を少年が憤るのもそれです。
だがどうでしょう？　騎者は安らかに馬を御し、
父は少年を己が命に従わせます。(8)

それに対してボリスは言う、

馬は時に乗り手をふり落し、
子も常に父の意の通りにはならぬ。
ただ不撓の峻厳をもってのみ我らは
人民を抑えうるのだ。嵐の鎮圧者、
英遇なる専制君主ヨアンはかく考え、
残忍なるその孫もかく考えた。
いや、人民は仁慈など感ぜぬ。

善を施しても有難がらず、
掠奪誅殺してもさして恨とせぬ。(9)

この乗馬問答における人民観を、例のモノローグにおいて見られた、いかにも仁愛深げなボリスの悲嘆の言葉とくらべると、なんという変り方であろう。この変化は何によってもたらされたものであろうか？

思うに、ボリスも即位にさいしては、人民の幸福を一応考えたであろう。彼は彼なりに、人民が幸福になれるような政治を、できればおこないたかったにちがいない。しかし彼は何よりもまず地主貴族の階級の代弁者として舞台に登場したのである。彼の果すべき役割は地主貴族の利益を推進することであり、農奴制の確立もまさにその現われであった。そして農奴制度が人民（農民によって代表される）の利益に反する以上、相対立する二つの階級のいずれにも利益となるような政治がおこなわれがたいことは明白である。つまり、ボリスが人民を利益する政治を実際上おこなうということは、帝座から転げ落ちることなのであり、ボリスのセンチメンタルなモノローグにもかかわらず、土台、最初からできない相談なのである。このような政策をおし進めていく以上、民心がボリスから離反していくのは当然であらねばならない。いきおい、ボリスの晩年における人民観は人民を憎悪するごとき、まったく敵対的なものに変ってくる。それをまた不平満々たる貴族の野心家たちが自分の政治闘争に利用することになるのである。

専制政治と警察政治とはうらはらの関係にある。人民の利益を忘れた政治は力に頼らざるを得ない。セーフスクで僭称者軍にとらえられたロシヤの俘虜の証言によれば、

仕置のない日とてはなく、牢屋は大入り満員。

広場に人が、三人寄れば、
これはしたり、早くも間者がつきまとい、
ひまを見ては皇帝が
自ら密告者を訊問[10]

するという末期的な症状を呈するのである。また国境の居酒屋の場面では、関守の横暴が生き生きと描かれている。女将の言葉によると、「見回りに歩くなどというのは、ただ名目だけで、やれ酒を出せ、やれパンを出せ、やれ何を出せという始末で――ほんとうにくたばってくれりゃいいんですよ、罰当りどもが！」という嫌われ方で、事実、坊主どもにたかって無銭飲食をしようとさえする。

モスクワの大寺院広場の場面では、作者は半狂人の行者にボリスを批判させている。ボリスが、「ニコールカや、わしのために祈っておくれ。」と言いすてて退場すると、行者はその後を追って、「ならぬ、ならぬ！　ヘロデ王がために祈ることはならぬ。聖母さまがお許しなさらぬのじゃ。」とわめくのである。

なおボリスは家庭にあっては温情溢るる良き父として示されており、立派な人物に仕立てられている。ことに皇太子への遺訓の場面などは、劇中のすぐれた箇所の一つであろう。それだけに統治者としてのボリスの『峻厳』はけっして個人的なものでなく、専制君主の典型であると見るべきである。

以上、ボリスと民衆と貴族の三者の相互関係の基本線をたどってみたが、これを要約すれば、権力を獲得するのには民心の動向が重要なファクタアであるということ、政治の当事者や貴族は人民をただの権力争奪のための道具とし

か見ていないということ、個々の民衆はゼロにすぎなくとも、全体としての人民は大きな力だということである。そこで人民を自己の側につけるためにいろいろのトリックがおこなわれることになる。それはことによれば、現代の政治にもつながる問題である。

二

ボリス・ゴドゥノフが帝位について五年たった、ちょうどそのころ、チュードフ修道院の僧房にピーメンという有徳の神父がいた。若いころにはカザンの塔の下で戦ったり、シュイスキイに従ってリトワニヤの軍勢を撃退したり、ヨアンの宮殿とその華麗さをまのあたり見るといった充実した青春をおくり来って、今では年代記を書きつづることに残りの情熱をささげている老人である。

ピーメンの同房に寝起きしているグリゴーリイなる若い修道僧が、ある日ピーメンの昔語りを聞きながら、自分の現在の生活の味気なさを思い、ピーメンの若き日の華麗な、そして怒濤のごとく騒がしい時代に生きた者の生活をつくづく羨しく思う。ピーメンはそれをさとす。けれどもグリゴーリイはピーメンの口から、神父自らの体験談を、ドミトリイの死がボリスのさしがねであったことの確かな証言を聞く。ドミトリイがもし生きていたら自分と同年であることを聞いたグリゴーリイの夢想は限りなくひろがる。彼は僭称者になる決心をして修道院を脱走する（一六〇三）。

グリゴーリイはリトワニヤ国境で危く関守にひっつかまりそうになるが、機知と勇気で国境外へと難を逃れる。やがてポーランドに姿を現わしたグリゴーリイは自らドミトリイ皇子なりと名乗りを上げ、ポーランド国王の後押しで

モスクワに攻めのぼろうとする。もちろんポーランド国王はグリゴーリイの欺瞞を百も承知の上で、自分の政治的野心――ロシヤの侵略――を達成する手段として僭称者を利用するつもりである。宗教家もそれに加担する。つまりロシヤの正教徒をカトリックに改宗させるために一役買うのである。僭称者は僭称者で、彼らの意図がどこにあるかを充分に知った上で、自己の野望の実現に彼らの力を借りる。この辺の作者の筆はきわめて冴えている。ロシヤの政治が国内だけに限られた問題でなく、国際的な深いつながりの上で動いていくありさまは興味深い。グリゴーリイの野望は国際的陰謀と結びつく。

グリゴーリイに与えられた性格は、一言で言えばアヴァンチュリストである。適当に頭の回転がよく、大胆でもあり、弁舌さわやかで人をそらさない。かなり利口であることは、「それからは甚だ読み書きをよくするようになり、年代記も読み、聖人を称える讃美歌も作」ったという修道院長の言葉からも察しがつく。とにかく一かどの才子であって、ただのでくの坊ではない。

たとえば僭称者とカトリックの神父チェルニコスフキイの取引き場面である。

いや、神父、大して面倒なことはあるまい。
わしはわが人民の心根を知っている。
彼らに在っては信心は熱狂を知らない。
彼らにとって神聖なのは皇帝の亀鑑だ。
まではまだしも、その次に

わしは保証するが、二年と経たぬうちに
わが全人民と全北方教会は
副修道院長ヒョートルの権力を認めるであろう。(11)

と言うに至っては、大変な安請合の大風呂敷である。それに対して神父は、世間の手前もあるから言行に気をつけなさいと忠告する。

喧しい世間の手前を繕うことは、
屢々我らに魂の義務が命じるところです。
貴方のお言葉、御行為を裁くのは人々ですが、
御意向を見給うのはただ神様だけです。(12)

という言葉の裏をかえせば、心の中はどうせ誰にもわかりはしないから、体裁だけはつくろっておけ、ということになる。聖職者の偽善もいいところである！

それにしてもクラコフのヴィシネヴェツキイ邸に身をよせている僭称者が、お目通りを願い出たクールプスキイの息子や、ポーランド貴族ソバンスキイ、ロシヤ人のフルシチョフ、カザックのカレーラ、それに詩人らを謁見するさいに見せる外交官的才能は抜群である。あまりにも鮮かすぎて僭称者自身が軽薄に見えるほど弁舌さわやかである。相手により話しかける言葉を使いわけ、しかもまことにそつがない。

もっとも僭称者といえども時には取り乱さないわけではない。噴水の場面でのマリーナとのあいびきのときがそう

である。まことに気の毒なくらいのあがり方で、「大理石のニムフ」であり、「生命なき眼、微笑なき唇」の持主、冷静沈着な虚栄心のかたまりであるマリーナとは好個の対照である。

しかしながら、考え方によれば、これはむしろ偽ドミトリイが美女マリーナの前ではいかに純情であるを示すものであり、玉座を棒にふっても好きな女と連れそいたいという熱情は見上げたもの、彼の美点でさえあるように思われる。マリーナが立身栄達のほかは何ごとによらず念頭にない石のように冷たい女だとすれば、偽ドミトリイは時にはお調子に乗って今渡りかけている危い橋からすべり落ちそうになる、お人好しの情熱家である。この二人のあいびきは一種の果し合いである。勝敗はあずかり、あるいは相打ちというところだろうか。二人のせりふのやり取りはまさに真剣勝負といった気魄にみちている。恋の熱にうかされた偽ドミトリイが自分の正体を明かしてマリーナの愛を求める。マリーナは相手が王子と思いきや、下賤の者と告白されて侮辱を感じ、きっぱりと拒む。僭称者はさすがにむっとして、自分は自分の道を行く、お前なんぞに用はない。雷帝の亡魂がわしを皇子にしたのだ、わしは皇子だと応酬する。マリーナは、あなたの秘密を人にばらしたら？　とおどかす。それに対して偽ドミトリイは、

わしがお前を恐れるとでも
お前は思うているのではないか？
人々がロシヤの皇子よりも、
ポーランドの乙女を信じるとでも？
したが恐らく、国王も、お前の父も貴族たちも、

わしの言葉が真実だとは思うておるまい。
わしがドミトリイであろうと、あるまいと――
彼らに何の係わりがあろう？
だがわしは軋轢と戦争の口実だ。
彼らに必要なのはただそれだけで、お前は、
「叛逆者だ！」とてそれこそ、口を噤まされよう。(13)

核心をついた僭称者の言葉に、マリーナは急いで和解する。彼女は僭称者がモスクワ帝国の玉座についたとき、求婚の使節を派遣することを求める。

しかし、申上げますが、貴方のおみ足が
玉座の階を踏まぬうちは、
貴方のためにゴドゥノフが廃位されぬうちは、
愛の言葉は聞きますまい。(14)

と言って彼女は立ち去る。そのあとでの僭称者の独白――

いや――ゴドゥノフと戦ったり、
宮廷づきのイエズス会士をごまかす方が、
女を相手にするより楽じゃ。いまいましい、やりきれぬわ。

こんがらかす、絡みつく、言いよる、
手から滑りぬける、つべこべ言う、嚇かす、咬みつく。
蛇だ！　蛇だ！わしが震えたも道理じゃ。
危く彼女にしてやられるところだった。[15]

そしてぐずぐずと事を決しかねていた僭称者も、やっと進軍の決心をつける。今やそれ以外に彼の進むべき道はないからである。

偽ドミトリイが敗走した軍隊をひきつれて森に停泊する場面では、彼の楽天的な性格が発揮される。はじめ有利だった戦況も、ボリスの傭兵であるドイツ人部隊の活躍によって敗北と変る。そのドイツ人部隊を僭称者は賞めそやして、「天晴じゃ！　まことに天晴、気に入った――今にきっと彼らで　親衛兵を編成してやるとも。」と言うのである。しかもそのとき、彼の軍勢はことごとく、木端微塵に粉砕されたのだった。

僭称者にもまた一片の良心がなくはない。「わしはそちたちを率いて同胞を攻めようとしている。わしはリトワニヤをロシヤに招いたのだ。わしは美しきモスクワへの　間道を敵に示すのだ！……」と言うとき、彼の心はうずいたにちがいない。しかしそれもボリスのせいだ、みんなボリスが悪いのだ、罰が当るならボリスに当れ、といった形で彼の罪悪感は解消される。

グリゴーリイが軽薄ながらも魅力的な人物として描かれていること以上のごとくであるが、作者の狙いは、僭称者を通じて、外国のロシヤに対する陰謀を生き生きと表現する点にあったものと思われる。

三

劇全体を通じて最も主要な役割を演じている貴族は、疑もなくシュイスキイである。彼はゴドゥノフの即位に大の不満を抱きながらも、時期が来るまではじっと待つだけの忍耐心のある、そして政治の動向の大勢を的確に見抜くだけの器量のある、駆引きの巧みな狡獪な人物である。彼はゴドゥノフを中心とする政治闘争の渦の中を上手に泳いで、つねに自分を華やかな陽の当る場所におく。したがって、元来が反ゴドゥノフ派の人物ではあり、不気味な奴だとゴドゥノフに思われながらも、最後まで失脚することがない。

「わしは臆病者ではござらぬが、さりとて馬鹿者でもない故、無駄に首を括るのは真平じゃ」。と自ら称する通り、いよいよゴドゥノフが皇帝になることが決定するとなると、君、ほら、いつか君が言った通りになったぜ、というヴォロトゥインスキイの誘いには乗らないで、

時にとっては忘れることも肝腎じゃ。

……

わしがおらぬでは目にもつこう(16)——

と言い放って、ゴドゥノフ即位祝賀の酒席へと急ぐのである。

アファナーシイ・プーシキンが、僭称者偽ドミトリイがポーランドにあらわれた、という知らせをもたらすと、シュイスキイは早速参内してゴドゥノフにそのことを奏上する。もちろん、それは身辺のスパイの眼をごまかす必要上、

先手に出たということもあるが、自分の眼でこのニュースに対するゴドゥノフの反応を直接確めることも目的としてのことである。両雄の間で虚々実々、火花を散らす言葉のやりとりがなされる。

そののち僭称者の噂が国中にひろまるようになったとき、人民が流言に惑わされぬよう、政府としてはどんな手を打つべきか、対策が協議される。その御前会議の席上、総主教が、亡き皇子ドミトリイにまつわる霊験物語を披露し、一番良いのは「聖なる御遺骨」をクレムリンに移し、アルハンゲリスキイ大寺院に安置することだと説いて、並居る一同を困惑させ、ボリスをして顔ににじみ出る冷汗を数度拭わしめたとき、「したが、神父どの」、と口を切り、得意の弁舌をふるってボリスを窮境から救い出し、その場をつくろうことにシュイスキイは成功する。権謀に長けたシュイスキイはかくて、皇帝ボリスの臨終のさいには、ボリス自身により、皇子フョードルの最も信頼してよい助言者として名指しをうける。彼自身の計算によれば、一歩々々、確実に皇帝の座に近づくための手順が踏まれているのである。シュイスキイは煮ても焼いても食えない海千山千の老獪な人物であり、いかにも動乱時代の怒濤を乗切って最後には首尾よくロシヤ皇帝の座につくべき、斎輩を抜いた存在と言っていい。万座の中で必らず目につく人間、将に将たる人間、けれどもいわゆる寝業師であって、曲者たるを免れない不気味な実力者――それがシュイスキイである。

シュイスキイに比較すれば、最後になってゴドゥノフの遺志を裏切る武将バスマーノフのごときは甚だ単純な、わかりやすい人物である。もちろん彼とても自分を重用したゴドゥノフの恩義に対し、その息子フョードルに叛くことは情誼において忍びなかったであろう。けれども時の大勢のどうにもならないことを悟った彼は、自己の保身のために宣誓を破り、「年少の戴冠者の信頼に　恐ろしい裏切をもって報」いるのである。

また作者が特別の関心をもって登場させた人物には、先に述べたアファナーシイ・プーシキンと、その甥で僭称者の参謀格として縦横無尽の活躍をするガヴリーラ・プーシキンとがいる。ボリスに、「二心あるプーシキン一族」と言わせている作者プーシキンは、自分の祖先が謀叛人であることに誇りを持っているかのようである。彼自身その傾向ありとの故を以てカフカースに流されたのち、当時はミハイロフスコエ村に配流の身であった。

物語の進展とともにガヴリーラ・プーシキンは大きな役割をになって舞台に登場する。バスマーノフと談判して、戦わずしてロシヤ全軍を僭称者の味方につける工作、また人民を前にしての雄弁がそれである。政治斗争において彼の果す役割は重要である。ゴドゥノフ朝覆滅のためにつくした彼の功績は多大である。一言で言えばガヴリーラ・プーシキンは外交的手腕に秀でた策士である。そして歴史の方向を大きく決定づけることに力のあった自分の祖先の一人に、作者が現実には果し得ない自分の夢を託したであろうことは充分に推察できるところである。

四

ゴドゥノフ朝打倒の声が公然と聞かれるようになってからも、なおしばらくゴドゥノフ政権は安泰である。貴族や陰謀家の政権奪取が実現するのには、ゴドゥノフの死が必要であった。ゴドゥノフに遺児を託されたバスマーノフ将軍は、若年の皇帝に味方する決心である。そこへガヴリーラ・プーシキンが乗りこんできて、ドミトリイ（僭称者）に帰順することをすすめる。ドミトリイ軍の強みがどこにあるかをプーシキンはこう説明する。

正直な話だが、味方の軍勢はやくざ者だ、

カザックはただ村落を掠奪するばかり、
ポーランド人はだぼらを吹いて、飲んだくれ、
またロシヤ人ときたら……言わずと知れたこと……
わしは貴公の前で詭弁を弄そうなど致さぬ。
したが、我々の強みがどこにあるか、御存知かな、バスマーノフ？
軍隊ではない、いや、ポーランドの援助でもない、
輿論だ。そうだ！　人民の輿論なのだ。(17)

政権争奪闘争における鍵はここにある、人民の輿論を自分の側に引きつけた方が勝つのだ、とガヴリーラ・プーシキンは言う。この道理にはバスマーノフも服せざるを得ない。

政権を獲得するためには人民を味方につけなければならない。人民を自分の側に引きつけるためには、したがって、権謀術数、奸策をもいとってはならない。――と、このように考える根底には、人民は無知蒙昧なるが故に、どうにでもなるという認識がなければならない。「ボリスが謀をやめぬ時は、人民を巧みに動揺させるのだ」とシュイスキイが言うのはこの思想である。人民はただもう彼らに利用されるためのもので、自らの判断の上に立って行動する能力があるとは認められていないのである。その内部に複雑な利害関係の対立・矛盾を蔵しながらも、最後にゴドゥノフ打倒派は勝利を得る。人民はそれをただ無自覚に傍観しただろうか？　眼前でおこなわれた政権の交代に盲目であったろうか？

戯曲の結末はこの問に答えるにきわめて暗示的である。数名の貴族が兵隊をつれてクレムリンにあるボリス邸宅におしかける。邸前に集っている人民たちの耳に、やがて騒がしい物音や女の金切声が聞えてくる。一瞬ふたたび静まる。と、モサリスキイ――貴族――が昇降口に姿を現わす。

モサリスキイ

皆の者！　マリヤ・ゴドゥノワとその子フョードルは、毒を仰いで倒れた。我らはその死体を見たのじゃ。（人民恐怖のあまり沈黙）何でお前たちは黙っている？　叫ぶんだ。皇帝ドミトリイ・イワーノヴィチ万歳！

人民（黙して答えず）[18]

モサリスキイのドミトリイ万歳をうながす声に、人民はあえて唱和しようとしない。プーシキンの最初の草稿では、人民が貴族の号令に応じて皇帝万歳をとなえることになっていたが、のちに現行のごとく改められた。この場合の人民の沈黙は何を意味するのか？　それは貴族の命令に対する不服従であり、人民自らの意志の表明にほかならない。このさいの沈黙はすなわち、人民の最大限のレジスタンスである。そしてその沈黙は明日の行動を暗示するところのものである。

戯曲の最初の部分での人民は、貴族の指図通りに動く、自己の意志を持たない全くのでくのぼうであった。彼らは貴族の書いた狂言通りに動いたにすぎない。しかるに劇の結末における人民はすでに、支配階級である貴族たちのやり方に、鋭い疑惑と批判の眼を向けているのである。したがって『ボリス・ゴドゥノフ』一巻の核心を要約するならば、政権争奪の闘争の中でただの道具としてのみ利用される民衆の悲劇と、支配階級に対する彼らの疑惑・批判の萌

芽とが示されているということになるであろう。

五

支配階級に対する疑惑に目覚めた民衆はどのような行動をもって次の一歩を踏み出すであろうか。プーシキンの悲劇の結末は一六〇五年であるが、その一年後、偽ドミトリイが倒されてほどなく、ボロトニコフの指導する大規模な農民戦争が勃発したことを思い浮べれば充分である。おそらく作者はそのことを念頭において筆を進めたにちがいない。

民衆の沈黙――それは嵐の前の静けさとでも言うべきであろうか。プーシキンは同様の手法を『ステンカ・ラージンの歌』[19]でも用いている。この詩が一八二六年の作であるだけに『ボリス・ゴドゥノフ』との関連が考えられてよい。詩の内容は次のごとくである。

ステンカ・ラージンは商いにアストラハンの町に通った。アストラハンの知事は彼に贈物を要求した。ステンカ・ラージンはサラサラいう絹織物、金糸で縫い取りをした織物をさし出した。知事は毛皮外套を所望した。毛皮外套は高価である。裾は真新しい。一つは海狸。もう一つは黒貂。ステンカ・ラージンは知事に毛皮外套を渡さない。「ステンカ・ラージンよ、よこせ。毛皮外套をさっさとよこせ。よこせば、礼を言おうが、よこさぬとあれば――絞り首だ。広野の緑の柏の木にぶら下げるぞ、犬の皮を着せてな」。ステンカ・ラージンは考えに考えた。そして言うには――「いいとも。毛皮外套を取りなされ。毛皮外套を取りなされ。事が荒立たないように」。

ステンカ・ラジーンは知事の横暴にあえて反抗しようとせず、大人しく引き下がる。しかしここに示された彼の従順が、どんなに強い憤りを胸中深く秘めたものであったかは、彼によって指導された農民戦争（一六六一―七一）の苛烈さが、何よりも雄弁に物語っている。「ボリス・ゴドゥノフ」の結末の人民の沈黙も、まさにこのような民衆の行動の可能性をはらんだものとして理解されるべきであろう。

（補1）　およそ権力の存在するかぎり、民衆と権力の問題はつねにその新しさを失わないであろう。それは代議制に立脚する現代においても同様である。ルソーの言うように、「一般意志はけっして代表されるものではない。……イギリスの人民が自由であるのは、議員を選挙するときだけで、選挙がおわるやいなや、かれらはどれいとなり、無に帰する」のである（高島善哉他『社会思想史概論』七九頁）。さらにまた次の議論には充分な論拠があるように思われる。「ディドロの国家主権は、人民の主権者との契約によってできあがり、この契約は両当事者のそれぞれに義務をおわせる。したがって、一方が義務をまもらなければ、他方は契約を破棄する自由をもつ。具体的にいえば、主権者が人民の幸福（その条件としての自由・平等・所有）を確保しえない場合には、人民は抵抗する権利をもつのである」（同上、七三頁）。

（補2）　プーシキンが自分で、一八二五年一一月七日と日づけを入れている原稿では、戯曲が人民の唱和で終っている。

『皇帝ドミトリイ・イワーノヴィチ万歳！』

現行の結末は一八二五年一二月一四日（デカブリストの乱）以後に改められたものである（ゴロジェツキイ『プーシキンのドラマツルギー』一三八頁）。なおこの戯曲の書き始められたのは一八二四年一二月である。

（1）Шуйский.

Чем кончится? Узнать не мудрено:

Народ еще повоет да поплачет,

Борис еще поморщится не много,

Что пьяница пред чаркою вина,

И, наконец, по милости своей

Принять венец смиренно согласится;

（2）Народ. Один.

Неумолим! Он от себя прогнал

Святителей, бояр и патриарха.

Они прел ним напрасно пали ниц

Его страшит сияние престола.

（3）Заутра вновь святейший патриарх,

В Кремле отпев торжественно молебен,

Предшествуем хоругвями святыми,

С иконами Владимирской, Донской,
Воздвижется; а с ним синклит, бояре
Да сонм дворян, да выборные люди
И весь народ московский православный,
Мы все пойдем молить царицу вновь,
Да сжалится над сирою москвою
И на венец бларословит Бориса.
Идите же вы с богом по домам,
Молитеся, да взыдет к небесам
Усердная молитва православных.

(4) Народ. Один. (тихо)
О чем там плачут?
Другой
А как нам знать? то ведают бояре,
Не нам чета.

(5) Народ. Один.
Все плачут. Заплачем, брат, и мы.
Другой

Я силюсь, брат, да не могу.

Первый

Я также. Нет ли луку? Потрем глаза.

Второй

Нет, я слюней помажу. Что там еще?

Первый

Да кто их разберет?

(6) Так, здравая, она (совесть) восторжествует

Над злобою, над темной клеветою…

Но если в ней единое пятно,

Единое, случайно завелося,

Тогда——беда! как язвой моровой

Душа сгорит, нальется сердце ядом,

Как молотком стучит в ушах упрек,

И всё тошнит, и голова кружится,

И мальчики кровавые в глазах…

И рад бежать, да некуда…ужасно!

Да, жалок тот, в ком совесть нечиста.

(7) Не род, а ум поставлю в воеводы;
Пускай их спесь о местничестве тужит;
Пора презреть мне ропот знатной черни
И гибельный обычай уничтожить.

(8) Всегда народ к смятенью тайно склонен:
Так борзый конь грызет свои бразды;
На власть отца так отрок негодует;
Но что же? конем спокойно всадник правит,
И отроком отец повелевает.

(9) Конь иногда сбивает седока,
Сын у отца не вечно в полной воле.
Лишь строгостью мы можем неусыпной
Сдержать народ. Так думал Иоанн,
Смиритель бурь, разумный самодержец,
Так думал и——его свирепый внук.
Нет, милости не чувствует народ:
Твори добро——не скажет он спасибо;
Грабь и казни——тебе не будет хуже.

(10) Что день, то казнь. Тюрьмы битком набиты.
На площади, где человека три
Сойдутся——глядь——лазутчик уж и вьется,
А государь досужною порою
Доносчиков допрашивает сам.
(11) Нет, мой отец, не будет затрудненья;
Я знаю дух народа моего;
В нем набожность не знает исступленья:
Ему священ пример царя его.
Всегда, к тому ж, терпимость равнодушна.
Ручаюсь я, что прежде двух годов
Весь мой народ, вся северная церковь
Признают власть наместника Петра.
(12) Притворствовать пред оглашенным светом
Нам иногда духовный долг велит;
Твои слова, деянья судят люди,
Намеренья единый видит бог.
(13) Не мнишь ли ты, что я тебя боюсь?

Что более поверят польской деве,
Чем русскому царевичу?——Но знай,
Что ни король, ни папа, ни вельможи——
Не думают о правде слов моих.
Димитрий я, иль нет——что им за дело?
Но я предлог раздоров и войны.
Им это лишь и нужно, и тебя,
Мятежница! поверь, молчать заставят.
(14) Но——слышит бог——пока твоя нога
Не оперлась на троные ступени,
Пока тобой не свержен Годунов,
Любви речей не буду слушать я.
(15) Нет——легче мне сражаться с Годуновым,
Или хитрить с придворным езуитом,
Чем с женщиной——чорт с ними; мочи нет.
И пугает, и вьется, и ползет,
Скользит из рук, шипит, грозит и жалит.
Змея! змея! Недаром я дрожал.

Она меня чуть-чуть не погубила.

(16) Теперь не время помнить,

.....

Отсутствие мое заметить могут——

(17) Я сам скажу, что войско наше дрянь,

Что казаки лишь только села грабят,

Что поляки лишь хвастают да пьют,

А русские…да что и говорить…

Перед тобой не стану я лукавить:

Но знаешь ли, чем сильны мы, Басманов?

Не войском, нет, ни польскою помогой,

А мнением; да! мнением народным.

(18) Мосальский

Народ! Мария Годунова и сын ее Феодор отравили себя ядом. Мы видели их мертвые трупы.

(Народ в ужасе молчит)

Что же вы молчите? кричите: да здравствует царь Димитрий Иванович!

Народ безмолвствует.

(19) 《Песни о Стеньке Разине》. ニコライ一世はこの詩の発表を許さなかった。全部で三篇より成り、本稿に直接関係

のあるのは第二篇である。